

近江八幡の水郷

近江八幡の水郷は、琵琶湖と近江八幡の街の間にある 354 ヘクタールの保護地域で、水路、ヨシ原、水田、集落が複雑に入り組んだ景観を形成している。この水郷は、人間が交通や漁業のための水路を作ったり、ヨシ原を耕したりして、何世紀にもわたって自然景観と関わりながら形成されたものである。水郷のヨシは丈夫なことで知られ、伝統的に屋根材や建築材、衝立やすだれの材料として利用されてきた。また、ヨシは湖岸を浸食から守り、水を浄化し、さまざまな水鳥や魚の生息・繁殖地となるなど、重要な自然機能を担っている。

八幡堀と琵琶湖、西の湖は水郷を流れる水路で結ばれている。この水路の利用は、1585 年、武将の豊臣秀次（1568-1595）が八幡山城を築き、城下に八幡町（現在の近江八幡）を設け、八幡堀を掘らせて、水郷を経由して八幡と琵琶湖を結んだことに端を発している。以後、水路は近江八幡を商業の中心地として繁栄させるために重要な役割を果たした。また、秀次が公家の船遊びを真似て、船上で茶会を催したことが、この水路での船遊びの始まりと言われている。水郷の風景を味わうには、今でも船旅が最適だ。

この地域は日本語で「水の故郷」と意味する「水郷」と呼ばれ、自然の景観と人々の暮らしが密接に関係していることを表現している。近江八幡の水郷は国の重要文化的景観に選定されている。